

無畏論と仏護註の譬喩表現

齋 藤 明

無畏論、青目註、ならびに仏護註の三文献は、いずれも『根本中論』に対する簡潔な註釈書であり、その方法もまた、『根本中論』と同様に、広義の帰謬論法をベースとする点で共通している。これらの三文献はまた、瑜伽行派による唯識説への言及や批判をなすこともなく、中観派 (Mādhyamika) という自称を用いるに至ってもいない。したがって、中観派を自認し、かつまた唯識説への批判を展開しているかどうかという点をメルマールに、中観思想史を初期と中期に区別することが許されるとすれば、先の三文献は明らかに、中観思想史上の〈初期〉に位置するといえる¹⁾。

ところで、周知のように、これらの註釈文献をめぐっては、著者、およびテキスト上の相互関係、さらには成立順序および年代の問題もまた、厳密には未解明のままに残されているといえる。そこで本稿では、無畏論および仏護註のそれぞれに典型的にみられる譬喩表現を紹介し、あわせて、その検討を通して、以上の問題にせまる手がかりの一つ二つを探ってみたい。

I. まず、無畏論に典型的な譬喩表現といえ、主として章末におかれる簡明な譬喩が指摘される。例えば、第二十一章の末尾には、

このように考察するならば、三時において生存の相続 (=bhavasamptāna) は理に合わない。そうであるならば、三時において、あらゆる点から考察して存在しないもの、それがどうして生存の相続でありえようか。すなわち、焼けた種子のようなものである (sa bon tshig pa bzhin no//, D. Tsa 81b2)。

とある。ここにおける「焼けた種子」の譬喩は、生存の相続の不可能であることを、焼け焦げてしまってもはや発芽作用のない種子に喩えるのであるが、同じ譬喩は、『維摩経』²⁾や『楞伽経』“dagdhabija”³⁾の中にも見られる。結論のあとにこのような簡明な譬喩を添えるのが無畏論の特徴の一つで、とりわけ章の末尾に採用されるケースが多い。同類の譬喩は、全二十七章のうち十六の章末に置かれており、ときに、同一の喩例が異なる文脈に適用されてもいる。以下、「のようなものである (bzhin no=-vat, iva, etc.)」の訳を省略して、章末の譬喩に用いられる素材のみを列挙すると、陽炎 (smig rgyu; 1章)、旋火輪 (mgal me'i 'khor lo;

2, 19章), 塩水を飲むこと (tsha chu 'thung ba; 3章), ガンダルヴァ城の空であること (dri za'i grong khyer stong pa; 4章), 盲人 (dmus long; 5章), 東蘆 (mdung khyim; 6章), 瞑想家の頭上の髑髏 (bsam gtan pa'i mgo la thod pa; 13, 23章)⁴⁾, 天地 (gnam sa; 14章), 虚空 (nam mkha'; 16章), 焼けた種子 (sa bon tshig pa; 20, 21, 26章), 化作 (sprul pa) あるいはアングリマーラ (sor phreng, = Aṅgulimāla; 25章), 難陀 (迦) 菩薩 (byang chub sems dpa' dga' byed; 27章), の十二種である。

また, 同類の譬喩は, 章末以外にも, 牛の角 (ba lang gi rwa; D. Tsa 42a7), 火と水 (me dang chu; 43b4), 猫と鼠 (byi la dang byi ba; 45a6), 灯火と闇 (mar me dang mun pa; 63b2), 灯火によ〔って〕照らされ〔る〕瓶 (mar mes bum pa; 74b3), ならびに先にも見た, 焼けた種子 (sa bon tshig pa; 80b1-2) という六例が散見され, いずれも当該の結論に添付される形で援用されている。

ところで, 無畏論はまた, 偈頌そのものに譬喩が含まれている場合にはそれらを詳説し (D. Tsa 65b6-7, 86a7, 89a6-7, 93a7), それ以外の譬喩形式は, 理由文と喩例文を補足する『般若灯論』の解説が後に混入した⁵⁾ と考えられるものを除けば, ごく僅かである (82a1-2, 3, 5, 91b5)。したがって, この註釈の場合には, 以上にみた簡明な譬喩表現をもって典型的であると見なすことができる。

II. ここで次に, 仏護註に特有な譬喩形式に目を転じてみよう。同註釈はしばしば, 論争相手の無理解を論すために, 反論の冒頭において, いささか皮肉を含んだ, 具体的でしかも定型的な譬喩を採用している。例えば, 第十四章には,

答える。〔どうして〕君は, 不能者を羨むのか? 君は, 和合 (=saṃsarga) が無いにもかかわらず, 和合者 (saṃsraṣṭṛ) が存在すると考えているのだ。

bshad pa/ci khyod ma ning la phrag dog za 'am/khyod phrad pa med par phrad pa po yod pa nyid du 'dod ko// (D. Tsa 223a5-6).

とある。この中の下線を付した ci khyod (khyed)... 'am/khyod...ko// の形式は, 仏護註にはば一貫する譬喩表現となっており, この文献の特徴的な個性の一つといてよい。いまの例では, 目と, 視覚対象である色かたちと, 視覚の三者などの和合 (saṃsarga) が否定されてもなお, 目等の和合するものの存在を主張する反論者を, 性的結合 (saṃsarga) が不可能であることも分らずに不能者を羨んでいるようなものである, との喩えをもって非難するわけである。

ところで, このチベット語訳文の末尾に置かれた終辞 ko については一言に値する。周知のように, 通例の終辞 (rdzogs tshig) の場合, 直前の語に添後字 (rjes 'jug) があれば, それを基字 (ming gzhi) として O 母音をとる。また, da drag po の

後ならば to, 直前の語が母音で終わっていれば 'o となる。したがって今の場合にも、通常用例から推せば、当然 'dod do// が予想されるところである。しかしながら、仏護註のこの定型的な譬喩表現において特異であるのは、三十を越える類例文にあって、通例のルールに従った終辞を採用しているケースはむしろ稀であって⁶⁾, sgrub par byed ko (D. Tsa 238b7), brjod ko (171a3), mthong ko (211a3), sems ko (221b3) など、版本の如何にかかわらず、いずれも ko を終辞とする点である。その意味内容ならびに用法を確認するうえでも、仏護註以外の用例が俟たれるところである。

III. さて、以上のような型をもつ仏護註の譬喩表現であるが、次にその実例を見てみよう。ここでは、紙数の制約もあるため、... 'am, すなわち上の例における「不能者を羨むのか」に相当する箇所のみを列举すると、以下の通りとなる(左端の数字は章番号を示す)。

- 1 拳で空を打つのか? (D. Tsa 164a1-2)
生まれてもいない子供の財産によって、[その]子の母を娶ろうと考えるのか?
(164b2-3)
自分の妻を得てもいないのに、子供の妻を得ようと思うのか? (164b5-6)
- 2 心の愚かさのために、名前が変わってしまっているからといって、わが子を認識しないのか? (171a3)
この空中に立ち上がって動き回るのか? (171a7)
子供が生まれてもいないのに、[その子の]死について悩みをいただくのか? (171b5)
殺人者だけを取り締まるのか? (173a6)
手を広げて哀れに動きまわり、息を切らしながら、蜃気楼の水のなかを泳ぎまわるのか? (173a7-b1)
子供を望んでいるのに、不能者と同棲するのか? (173b3-4)
- 3 案内人を伴わずに、荒野でさ迷っているのか? (176b7)
- 7 剣に通じているからといって、ほかならぬ母を撃つのか? (191b6)
空華をかき集めるのか? (192a5)
絵画の火を消そうというのか? (196a5)
矛盾を起こすことなく、「その通りだ」と発言するのか? (197a7-b1)
灯火によって太陽をさがし求めるのか? (197b3-4)
- 8 胡麻油 (=taila) を望みながら、ティラカ (=Tilaka) 樹をさがし求めるのか? (201a3-4)
- 11 蜜 (=madhu) を見ながら、断崖 (=prapāta) を見ないのか? ⁷⁾ (211a2-3)

- 12 根の腐った木に水を注ぐのか? (216a1)
- 13 幻の象が活動すると考えるのか? (217b2-3)
- 14 [君を] 排斥する者に従うのか? (221b2-3)
茅草の馬で疾駆しようとするのか? (222b4-5)
不能者を羨むのか? (前出)
- 15 馬に乗っていながら馬を見ないのか? (224a3)
- 16 空の容器を護持するのか? (231a1-2)
- 17 ガンダルヴァ城の城壁を築いては破壊するのか? (235b5)
障壁の土台が敷かれていないのに、障壁を設けるのか? (238b6-7)
- 20 道に入っているながら、道をたずねるのか? (252a4)
村が空であるのに城を建造するのか? (255b1)
- 21 ヴィドゥラ (=Vidula) 樹の果実を求めるのか? (257a6)
- 22 適切に準備されたものの中の半分だけで[身勝手に] 踊るのか? (262a5)
敵方の証拠を味方の意見として受けとるのか? (263b3-4)

このように、三十をこえる仏護註に典型的な譬喩表現は、いずれも反論者の無理解や恣意的な強弁を、空しいこと、あるいは身勝手な偏見であると論じ、非難するところに狙いをもつものといえる。

IV. 以上のように、無畏論と仏護註には、用法と形式の両面からみて、かなり色彩を異にする譬喩表現がそれぞれに、典型的なかたちで採用されている。現在の段階では、これらの譬喩の内容から、著作の成立年代の幅をうかがう直接の手がかりは得られないとしても、しかしながら、青目註を含む三註釈を相互に検討するとき、われわれはいくつかの見逃すことのできない事実に逢着する。

無畏論にみた先の譬喩表現についていえば、まず第一に、これらはいずれも、9世紀初頭の成立と考えられる敦煌出土本にもそのまま確認される点が注目される⁸⁾。次にまた重要であるのは、すでに指摘されているように、無畏論と仏護註の第二十三章以降のテキストはほぼ全同で、後世、何らかの事情から、前者のテキストがそのまま後者のそれとしても借入されてしまったのであるが、見逃せないのは、その場合でも、仏護註は、先の譬喩表現だけは継承していないという点である⁹⁾。さらに第三に、内容的な近似性から、原テキストが本来同一であったとの意見さえある青目註には¹⁰⁾、これらの譬喩に相当する訳文は全く見られない。

これらの三つ、とりわけ第三の事実から、無畏論と青目註の内容的な隔たりを指摘し、原本の相違の例証と見なすこともむろん不可能ではないであろう。しかしながら、無畏論の譬喩が、前述のように、結論の後に補足的に添付される簡明

なものであり、しかも上の第二の事実から推して、これらの定型的な譬喩は、仏護註が第二十三章以降のテキストを無畏論から借入した時点では、本来存在しておらず、その後付加されたものと考えるのが適当であるように思われる。ただし、後世の付加とはいえ、チベット語訳写本の伝播過程におけるものではなく、先の第一の事実からも、同訳の依拠したサンスクリット写本はすでに、これらの譬喩の付加されたテキストを伝えていたものと考えられる。

また次に、仏護註に典型的な譬喩表現についていえば、先のように、これらが第二十三章以降に皆無であるという事実は無視できない。これは明らかに、第二十二章以前が本来の仏護註のテキストを伝承するもので、同章より後の五つの章のテキストは無畏論のそれをほぼそのまま取り入れて成立したものである、というこれまでの定説を改めて補強する¹¹⁾。なお、仏護註が第二十三章以下のテキストを無畏論から借入した時点については、二十を越える *Bhā(va)viveka*(490-570項)による *Buddhapālita* 批判が、第二十三章以降には見られないという事実を考え合わせると¹²⁾、遅くとも、前者による『般若灯論』が成立した時点には、仏護註の現行のような合体テキストは出来上がっていたものと推測される。

1) 斎藤明「〈初期〉中観派とブッダパーリタ」『仏教学』24号, 1988, p. (39)-(43) 参照。

2) P. No. 843, Vol. 34, Bu 214b3.

3) B. Nanjo ed., *Lankāva'ara Sātra*, 1923, p. 41, l. 3; P. No. 755, Vol. 29, NGu 77a8.

4) 同一の譬喩が Candrakīrti の『四百論註』の中に、*dhyāyīśiraḥkapālavat* (H. Shāstrī ed., “*Catuhśatikā by Ārya Deva*”, *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. III, No. 8, 1914, p. 473, l. 22) = *bsam gtan pa'i mgo'i thod pa bzhin no* (D. Ya 133b2) とあり、この直後に、「ある瞑想法が、心が迷乱して『私の頭には、鬮體がついている』というとき、ある人が彼に、『これは君の頭から落ちたのだよ』といって、別の鬮體を投げつける。これによって彼は、『そうであったのか』と覚って正気になる。妄分別を消し去ったためである」との解説が加えられている。

(『四百論註』のこの譬喩については、鈴木晃信氏の教示を得た。記して謝意を表したい。)

5) これらの例は、無畏註の第20から第22章に集中して見られる。いま、無畏註と『般若灯論』の対応箇所を示すと、D. Tsa 75b6=D. Tsha 201a2-3; 75b6-7=201a3; 78a2=204b4; 79b1-2=206b5-6; 79b2=206b6; 79b5-6=207a3; 79b6=207b4; 81a2=208b1; 83a5-6=212a2 の九例が確認される。なお、『般若灯論』のテキストが後に混入したと推測される同様の例は、仏護註の第7章にも見られる (D. Tsa 195b4-6 =D. Tsha 110a7-b2)。

- 6) 四大版本いずれも通例の終辭をとるケースは、第2と第13章に三例見られるが、いずれも rtog go の用例である。これらは、rtog ko との発音上の近似性によって説明されようか (D. Tsa 171b5, 173b4, 217b3)。また D. C. の兩版が通例の終辭をとる (D. Tsa 164b3 : 'dod do ; 252a4 : khong du ma chud do) のに対して、P. N. 兩版が ko (P. Tsa 185b3 : 'dod ko ; 285a3 : khong du ma chud ko) を採用する場合もある。これは、他の例から推すと、むしろ前者の方が後世、通例の形に改変されたと考えるべきであろう。
- 7) この譬喩は「断崖の蜜」として *Mahābhārata* (e. g. V, 62, 20-27) にしばしば登場する。原実「丘井の喩—二鼠譬喩譚—」『東洋学報』66-1・2・3・4, 1985, pp. 029-031, 037(n. 47) 参照。
- 8) 斎藤明「中観系資料」『講座敦煌6・敦煌胡語文献』, 1985, pp. 317-323 参照。
- 9) 近年、無畏論の四大版本に基づく校訂テキストを添えた研究が、Dissertation として提出されている。C. W. Huntington, *The "Akutobhaya" and Early Indian Madhyamaka*, Vol. I-II, The University of Michigan, 1986. ここにあげた第二と第三の事実については同著者もその pp. 22-23 において言及する。
- 10) 丹治昭義「無畏と青目注」『印仏研』31-1, 1982, pp. 83-88.
- 11) 平野隆「無畏註と仏護註の異同について」『印仏研』3-1, 1954, pp. 236-238 ; D. Seyfort Ruegg, *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India* (A History of Indian Literature, Vol. VII-1), 1981, p. 61 ; J. Fehér, "Identical Chapters in *Akutobhaya* and *Buddhapālita's* Commentary", *Altorientalische Forschungen* 13, 1986, pp. 134-175. Fehér はこの中で無畏論と仏護註のテキストの異同を詳細に論じ、北京・チャーネ兩版に基づいて第23章以降の仏護註のテキストを作成し、無畏論との相違を注記する。
- 12) 光川豊芸「『般若灯論』における清弁の仏護批判—第一章より第十章まで—」『龍大論集』389/390, 1969, pp. 157-171 ; 江島恵教『中観思想の展開』, 1980, pp. 171-178, 198(n. 42) 参照。

<キーワード> 無畏論, 仏護註, 譬喩

(三重大学助教授)